

桜門春秋



130



特集

「自主創造」への 新たな挑戦

桜門春秋



【表紙解説】
 日本大学創立130周年
 130年にわたり数多くの有為な
 人材を輩出してきた本学は、日
 本の近代化、各界の発展に大き
 く貢献してきた。今後もさまざ
 まな新しい取り組みを通じて、
 教育・研究の一層の充実に努め
 ていく。

1	●桜門アングル 創立130周年記念式典・祝賀会 令和に“新時代の祝典”
5	●トップエッセイ 輝かしい未来を目指して 日本大学常務理事 石井 進
6	●特集 「自主創造」への新たな挑戦
6	食で貢献、TFT活動
7	ゲーム感覚の化学教材考案
8	富士山でゴミ拾い大会／ボルネオ島でエコツーリズム
9	市立小松高で夏の体験授業
10	高校生の神楽甲子園
11	経済学部－自主創造型教員養成 生物資源科学部一次世代研究者支援
12	●一期一会 沢木 敬介氏 ラグビー サンプルブス コーチング・コーディネーター
16	●教育の現場から 文理学部「教職センター」 教職育成の伝統を継承 即戦力作りに意識改革
20	●研究最前線 商学部経営学科 中川 充准教授 「違い」を乗り越え、新しい価値を生み出す 組織的・戦略的マネジメントの研究に邁進
24	●連載・日本大学をつくった先人たち 第21回 鎌田 彦一
27	●高大連携教育への取り組み 付属校と大学の接続
30	●がんばる付属生 日本大学豊山女子中学校 保刈 彩菜さん
31	目黒日本大学高等学校 金戸 凜さん
32	●先生からのひとこと 日本大学三島高等学校・中学校教諭 齋藤 佑介 「汝、ペットを愛するように隣人を愛しなさい」
33	土浦日本大学高等学校専任講師 鈴木 幹太 スポーツ王国土浦日大
34	●創立130周年記念企画 温故翔新 一日大アスリートの現在・過去・未来－ 第7回 水泳部(SWIMMING) 男子競泳12年ぶりインカレ総合V 令和に復活遂げた「水の覇者」
36	●刊行物／編集後記 ●INFORMATION 130年の輝きと共に、未来を創る

特集

「自主創造」への 新たな挑戦

10月4日に開催された本学の創立130周年祝賀会で、あいさつに立った大塚吉兵衛学長は「今後も学生の成長を第一に考え、学生自らが成長を実感できるような取り組みを行い、未来への輝きを放ってまいります」と決意を表明した。その一つとして大塚学長が言及したのが「日大生のやってみたいを実現するプロジェクト」（自主創造プロジェクト）で、今年度33件が採択され、各プロジェクトが本格的に動き出した。今回、同プロジェクトの新たな挑戦を4企画紹介するとともに、地方創生への人材に意欲を燃やす芸術学部や、未来へ向けた経済学部や生物資源科学部の「自主創造」への新たな挑戦を特集する。

食で貢献、TFT活動

生物資源科学部Highers
文理学部SalamatA ☆



生物資源科学部食品ビジネス学科の学生たちが、「食を通じた社会貢献」を目指して学術研究グループ「Highers ☆」を設立したのは2011年。

高齢者や貧困・家庭環境からくる児童の孤食問題を解決するためのコミュニケーション・レストラン立ち上げに、手作りトマトスープなどのレトルト食品作りと並行して取り組んでいる3本柱の一つが、TFT活動だった。

TFT——「2人の食卓」を意味するテーブル・フォー・ツールの頭文字からとった活動は、肥満や生活習慣病を改善するためのメニューを先進国で販売し、飢餓等の貧困に苦しむ子どもたちを救うために始めたもので、日本のNPO法人が2007年に提唱。現在は企業や大学、病院の食堂のほか、カフェ、コンビニなど全国200団体以上が参加し、海外にも広がっている社会貢献運動だ。



自作メニューを販売する代表の井上さん(左)ら

「Highers☆」は発足した翌年からこれに取り組んでおり、毎月2回、食のキッチンを借りて、自分たちで考案したメニューの販売に乗り出している。この7月に用意したのは、「夏野菜たっぷりカラフルキーマカレー丼」。彩り豊かに夏野菜を配し、栄養バランスのとれた食事で、暑い夏を乗り越えようというの

である。そんな仲間たちが「日大生のやってみたいを実現するプロジェクト」への応募を決めたのは、TFIT活動をさらに普及させる狙いからである。学生課の仲介で、同じような国際ボランティア活動を展開する文理学部の「Salamat A」とコンビを結成。決め手となったのは、タガログ語で「ありがとう」を意味するサラマツトウから分かるように、実際にフィリピンに出かけ、現地の子どもたちへの教育支援を地道に継続している点を評価したからだ。

日大鶴ヶ丘の高校生も参加

その後、両学部の学園祭に出店し、フィリピンの「おふくろの味」大学イモを2度揚げして砂糖をまぶしたオヤツ「カモテ・キユー」や焼きイモを販売するとともに、それぞれの活動模様を紹介した。

もう一つ、学食でのTFITメニューも進行中だ。実は生物資源科学部の併設校である日本大学鶴ヶ丘高(東京都杉並区)の料理部と連携し、同校でも2年前からTFITメニュー作りに着手している。

さらに学生課の呼び掛けで、TFITメニューの採用は、国際関係学部や松戸歯学部、経済学部、三軒茶屋キャンパス、工学部に隣接する日本大学東北高校(福島県郡山市)まで広がってきた。

具体的なメニュー作りはこれからだが、「これまでの蓄積もあり、先方に合わせてメニューを提供できる」と代表の井上瑠菜さん(生物資源科3年)は自信満々だ。TFITメニューを手掛けて以来、この7年

ゲーム感覚の化学教材考案

理工学部・生産工学部・短期大学部

難しいと敬遠されがちな化学の世界。「しかし、ゲーム性に富んだ教材作りを続けていたら、意外に楽しくて……」と語るのは、「化学教材研究会」代表である大学院理工学研究科博士前期課程1年の阿部里奈さんだ。

同会の元々の母体は短期大学部(船橋

間で提供した食事は、合計5255食。月ごとのアンケート調査も実施してリサーチを重ねており、実績は十分だ。向上心を意味する「Highers☆」だが、さらなる高みを目指して、「活動の輪をさらに広げていきたい」と意気盛んである。

学園祭で掲示するポスター制作に高校生も参加



校舎)の生命・物質化学科での卒業研究。その際に参考にと示されたのがアメリカ化学会の学会誌で報告されていたゲーム性に富む教材の作成・改良で、それに触発されたのがそもそもの出発点である。最初は1人で取り組んでいたが、同好の士が1人、また1人と増え、現在は会員

数14人。阿部代表の所属する研究室が会員のたまり場になっている。

最初に開発したオリジナル教材は「有機合成カードゲーム」。有機化合物の部分構造（官能基）や反応式が書かれたカードを七並べの要領で配り、手札がなくなつた順に勝ちとなる。当初は中高生の自習向けにと考案したものだ。

「それをトランプ大の形にしたり、官能基を種類別に色分けしたりして、化学の知識のない子どもたちでも遊べるよう工夫を凝らした」（阿部代表）。その結果「日大生のやってみたいを実現するプロジェクト」に採択。その後もゲーム性やデザイン



カードゲームに子どもたちも夢中



自作教材を前にした阿部代表（右端）ら

ゲームの種類も、バッチを利用したボードゲーム、さらにはストローを使った分子模型作りなど、計5種類に増えた。

併設校とのシヨップも計画

開発したゲーム感覚の化学教材は好評で、理工学部や文理学部からのワークシヨップ・出前授業の要請、千葉市の科学イベント、日本理科教育学会の全国大会からの招聘などが相次ぎ、準備に忙しい。さらに「有機合成カードゲーム」については、クラウドファンディングを活用した商品化を検討中。一方で、理工学部の併設校である日本大学習志野高と千葉日大一高との間で、一緒にワークシヨップを進めていく計画もある。

「元々が子どもたちの理科離れ対策を目的にしていただけに、そんな教材が生まれれば……。化学を学ぶ学生たちだからこそ、オリジナルの教材が開発できるんです」と、より良い教材を目指す阿部代表の決意は固い。

富士山でゴミ拾い大会

生産工学部・生物資源科学部

富士山でのゴミ拾い大会は、生産工学部の廣田直行教授のゼミ生が発案。生物資源科学部の学生も加わり今年5月に「日本遺産環境改善部」が立ち上がった。

もともと廣田ゼミ自体が「コンペ&イベント&まちづくり&ディスプレイ」を重視し、年に一度は社会貢献活動に参加するのがルール。今年のテーマに掲げたのは、国連サミットで採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」の一つ、環境の持続可能性の確保だった。

放置されたゴミが目立つ富士の樹海で8月31日に清掃活動を実施。樹海を突っ切る道路の周辺に散開し、捨てられたペットボトルに発泡スチロール、さらには靴やサンダルまで、ビニール袋13個分のゴミ拾いに汗をかいた。

とはいえ社会貢献にも遊びの要素を加

えるのが当世風。樹海では天然記念物である鳴沢水穴へのツアーを加え、持ち帰ったゴミを生かしたりサイクルアート展を計画するなど、楽しい活動を考えた。

代表の樋渡

岬さん（生産工4年）は「趣味の登山で前々から考えていた富士山のゴミ問題。世界文化遺産ではなく、世界自然遺産に登録すべく、少しでも手助けできてよかった」と語っている。

清掃を前に樹海についてアドバイスを受ける



ボルネオ島でエコツアーリズム

国際関係学部・生物資源科学部

国際関係学部の富岡丈朗准教授のゼミ生で組織する「日大国際たんぼぼ」とい

ンボジアなど途上国に足を運び、その国で買集めた伝統工芸品を地域イベントなどで販売し、販売利益を支援金に充て



「日大生のやってみたいを実現するプロジェクト」

「日大生のやってみたいを実現するプロジェクト」(自主創造プロジェクト)は、本学の教育理念である「自主創造」の三つの構成要素の能力を、実践を通じて高めること。そして、学部間交流を通じて多様性に対する気付きを与え、自らの専門科目の学修をより深化させる一助とすることが目的で今年度にスタートした。

各プロジェクトは本学の正規生で構成され、2学部以上かつ5人以上の学生が参画。①文化の進展をはかる②持続可能な開発目標(SDGs)に取り組み③本学の発展に寄与する—のいずれか一つに該当している。今年度、学生から申請のあった60件のうち33件が採択された。

てきた。フィリピンで台風被害を受けた地域に漁船用ボートを寄付したり、カンボジアの小学校に給水塔を設置したりと、活動歴にも実績がある。

そんな「たんぽぽ」が生物資源科学部国際地域学科のゼミ生と組んで今回取り組むのは、マレーシアのボルネオ島北西部の寒村振興策である。

題して「サラワクわくわくプロジェクト」。ホームステイを軸にした農村滞在型プロジェクトで、地元で作った籠やコショウの商品化・販売も行う。ただの国際協力で終わるのではなく、それを地域に結びつけようとする取り組みだ。

現地のマレーシア大学サラワク校と協力する本格派で、しかも3年計画と息が長い。今年はフィジービリティ調査で、来年に商品化プラン、3年目に村内プロジェクトに昇華させるといふ。

代表の前田千晶さん(国際関係4年)は来春卒業する。「やる気のある学生に活動の場と仕組みを残しておきたいがために参加した」そうだ。

市立小松高で夏の体験授業

芸術学部が 地方文化の発信支援

写真に美術、音楽、演劇、放送と、芸術学部の5学科の教員や助手、学生の総勢23人が、石川県小松市の小松市立高で「夏のスペシャル合同授業」と銘打った体験授業を開催したのは、8月下旬の2日間。

初日は「カッコいいスマホ撮影と映える高校生活」で撮影の基本と実際の撮りかた、講評を通してみっちり学んだ。

2日目は特産の石材を高校生が彫り出して、「地球の音をイメージする」オブジェを制作。その彫り出す音をコン



オリジナル楽器と一緒に体験



上:小松高校での体験授業。下:石材を彫ってオブジェ制作



めやらぬ様子で異口同音に振り返る。

多彩な出会いから 新たな可能性

芸術学部が高校生への出前授業に乗り出したきっかけは、4年後の北陸新幹線の路線延伸を睥^みんだ小松市から、地域活性化への協力を求められたことだった。

とはいえ、単なる「賑やかさ」だけのお祭り騒ぎにはしたくなかった。「多彩な出会いと才能がつながり、そしてぶつかりあうことで、自らへ化ける」ことを目指す。それがそが日藝であり、そうできないと日藝が関わる意味はない(放送学科・星野裕教授)

そこで、芸術コースを抱える同校で、地域文化の発信に向けた教育支援を行う

ピューターに取り込む一方、小松市の名産である九谷焼で作ったオリジナル楽器と一緒に、全員が一つの音楽を生み出すエクスペリメンタル・ミュージック(実験音楽)を体験した。背景に映し出されるのは、石切り場から石材を切り出した際のビデオ映像。「小松ならではの石と九谷焼から生み出すアースミュージックワークショップ」と題するそれは、生徒に現代芸術の一端に触れさせようとの試みだ。

これを受講したのは、同校で芸術コースに学ぶ美術と音楽専攻の高校生たち。普段とは違う新鮮な授業に触発され、「写真の構図を考えることは、デッサンにも通じることがわかった」「違う視点を持つことの大事さがわかった。この体験から自分の可能性が広がれば」と、興奮も冷

方針が固まり、今年4月に木村政司学部長と和田慎司市長が包括連携協定に調印。今回の体験授業はその第1弾である。

上々の評判から、撮りためた授業映像などを元に、引き続き小松市が発進するCMやウェブのPR動画、同じ材料で高校のPR動画作りを進めることが決まった。内容は風光明媚な景色を紹介する観光PRではなく、小松の未来を担う若者の活躍に焦点をあてる考えだそうだ。

さらに市が開催する「こまつ笑顔フォトコンテスト」の審査委員に、写真学科の田中里実准教授が就任。北陸新幹線の小松駅開業に向けた首都圏でのPR展開についても、相談役として知恵を貸してほしいと要請されている。

また、好評に後押しされて、今後は大人レベルでの体験授業の開講を求める声も浮上しているほど。同校での夏の授業は、当然のように来年も開催されることになっている。

高校生の 神楽甲子園

広島県で開催9年目

「高校生が自ら運営します」がうたい文句の「高校生の神楽甲子園」も7月下旬の2日間、広島県安芸高田市で盛況のうちに



全員が触発されるユニーク授業

幕を閉じた。

広島県は全国でも有数の神楽が盛んな地域で、神楽団が各地で活動。出雲流神楽から石見神楽の流れをくんで演劇性と娯楽性を高めており、その中心である安芸高田市の神楽門前湯治村には専用の神楽ドームまであるほどだ。

神楽ドーム社長、溝本郁夫氏が経済学部OBという縁もあり、芸術学部はスタート時から協力、現在も校友会広島支部と共に応援している。こちらも安芸高田市の浜田一義市長と木村政司芸術学部長との間で連携協力協定を今年締結した。

大会は年々盛んになり、9回目の今年は全国から過去最多の18校が参加。総勢250人の高校生が重い衣装をまとい、スピード感あふれる舞を見せた。今回は特別



高校生が舞を競い合う神楽甲子園

しめるのも人気の理由だ。

最後は演劇学科の小林直弥教授の講評に続き、広島県立千代田高と岩手県立葛巻高の優秀2チームに日藝選奨のトロフィーが贈られた。

「新潟県十日町の大地の芸術祭のように、木村学部長を旗振り役に、神楽甲子園も日藝が貢献できる地域連携事業としてさらに拡大できれば」（小林教授）

地域芸術の担い手作りが始動

新潟の「大地の芸術祭」とは、信越国境に近い越後妻有地域で3年に1回開催される「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」のこと。周辺の102集落が参加する世界最大級の国際芸術展で、昨年は50万人以上が詰めかけた。

さらに、そこで経験を積んだスタッフにより、愛知県の「あいちトリエンナーレ」、香川県の「瀬戸内国際芸術祭」や、北アル

出演として富山県南砺平高が「越中五箇山民謡」、徳島県城西高が「阿波踊り」を披露。神楽以外に各地域の特徴ある舞を楽

プスや奥能登の展示会などへ広がりを見せて、全国各地に芸術祭のノウハウを伝えている。そんな「大地の芸術祭」の開幕は2000年から。実は小松市立高校の体験授業にも加わった美術学科の鞍掛純一教授を先導役に、芸術学部もその4年後から越後妻有の国際芸術展に参加し続けているのである。

その鞍掛教授が専門とする彫刻コースに、来年度から地域芸術専攻を設けることになった。「モノ作りを広めるには、地域と連携できる視野の広い経験値を持った人材が必要で、5人ほどの育成を考えている」

小松での体験授業を振り返って――。「高校生がすぐく前向きで、好奇心旺盛なことに打たれた。半数は地域に根付いて生きていく心持ちのようだから、自分たちの周辺地域の再発見・魅力作りに役立ててもらおう、引き続き尽力したい」

地方創生に向けた人材作りが、いよいよ動き始めた。



彫刻コース「地域芸術専攻」案内ポスター

ICTを導入 「自主創造型教員の養成」を目指す 経済学部教職課程



電子黒板によるプレゼン風景

平成31年度教職課程再課程認定の施行に伴い、教職課程の科目構成のうち、「教育の基礎的理解に関する科目等」および「教科の指導法に関する科目」において、文部科学省が定めたコアカリキュラムにしたがって授業内容・方法等を展開することが義務付けられた。その内容は、ICT機器を使った授業展開、チーム運営、グループワーク等が挙げられるが、経済学部でこれらに対応するために先頭に立ち、教職課程をけん引するのが卜部勝彦教授だ。

「本学だけでなく、日本中の教職課程を置く大学がコアカリキュラムを順守しなければなりません」が、経済学部はそれらにしっかりと対応が取れる環境が整っています。その中でわれわれは学生と本気でぶつかり、情熱を持った教員を育てています」（卜部教授）

卜部教授は元文部科学省の教科書調査官。平成25年に教授として招かれ、変わりゆく初等中等教育に対応可能な人材を輩出している。同学部では中学社会、高校の地理歴史、公民商業の教員免許を取得でき、履修者数は1学年で30人ほど。決して多くないが、少人数だからこそできる授業があるという。

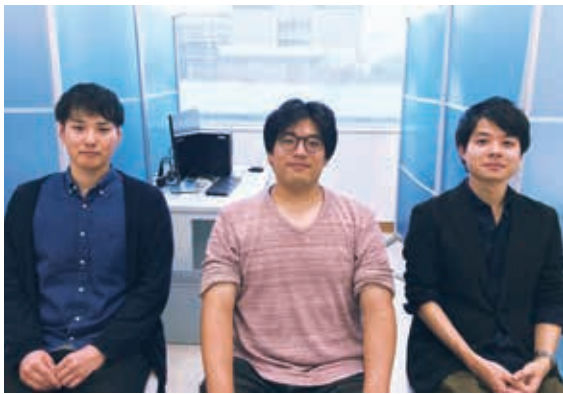
「少人数で全員が同じ目標に向かって勉強するため、学生同士や学生と教員との結束が強くなるのが本学部教職課程の強み。電子黒板（ICT機器）を導入し、実践が必要な教職課程科目に常に対応できる教室を確保しており、全員が実践型の模擬授業を体験できるのも少人数ならではのと言えます」（卜部教授）

教員採用試験で行われるグループ討議や場面指導等の対策も万全で、奈良県教育委員会で指導主事を務めていた奥田智教授が担当。実務だけでなく採用試験対策でも最善の環境で学生を教育していると言えるだろう。

現在、教員志望者は減少傾向にあるが、そういったなかでも、社会科学系に特化した「本気の教員」を輩出し続けている。経済学部が目指すのは社会科学教員として国の教育の核をなす人材、つまり「自主創造型教員の養成」である。



有能な若手研究者をバックアップ 次世代研究者支援事業 生物資源科学部



支援事業で採用された藤佑志郎さん、春日元気さん、三浦徳さん（左から）

本学の「教学に関する全学的な基本方針」で提唱されている「若手研究者が自立して研究できる環境の整備」の一環として、生物資源科学部では「次世代研究者支援事業」を平成30年度よりスタートさせた。本大学院博士後期課程または博士課程の修了者で学位を取得した者に対し、独立した施設の提供、研究資金を供与するという学部長指定次世代支援プロジェクトの一つだ。

「本学に限らず、大学院修了後に研究者としてのポジションを得るのが難しい時代です。私費での研究に行きつまずき、研究活動が止まる

ことも少なくありません。ですから、次のポジションを得るまでの間、生活の安定と研究の継続を保障するというのが支援の一番の目的です」（研究委員会委員長・山室裕教授）

採用されると、ポスト・ドクトラルフェローの身分で規定の月額給与、学部教員の個人研究費に相当する研究費、独立したオフィス等を支給・提供される。学術講演会での成果報告、活動報告書の提出が義務付けられる。支援期間は最長で3年間。これまでに3人が選ばれている。

「採用した3人は素晴らしい人材で、良き先例となってくれることを期待しています。彼らが今後どのような道をたどるかはわかりませんが、将来は本学で教壇に立ち、本学のさらなる教育の向上に尽力してもらえればと考えています」（山室教授）

生物資源科学部の新しい試みでは「学部ブランド創生研究」にも注目したい。こちらも学部長指定次世代支援プロジェクトで、ブランド食品の創出を生物資源科学部で行うというもの。現在は野菜（ホウレンソウ）や大豆など新ブランド食品の創生が進められている。

「次世代研究者支援事業」と「学部ブランド創生研究」の両輪でさらなる発展に取り組んでいる生物資源科学部。今後さらに学内外への周知を図り、研究者を志す若手の育成、魅力ある大学づくりに尽力していく。





日本大学企画広報部広報課

〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24

Tel.03-5275-8132

URL <http://www.nihon-u.ac.jp>